

パネル「採卵鶏の飼育過程」の解説

人工ふ化

採卵経営では、1農場当たりの飼育規模の大型化が進んでいます。

各農場では、計画的に新しいヒナを導入し、老いた鶏をとう汰しています。産業として一度にたくさんのヒナをふ化させる必要があることから、ふ化の作業は専門の種鶏業者が人工的に行います。

ふ卵期間は21日間で、ふ卵器の温度は37.5度、湿度60%程度に保たれています。

ヒナの導入とヒナの飼育管理

ヒナはふ化した直後から歩き出し、エサや水も自ら取ることができるので、ふ化直後のヒナを導入することもできます。しかし、生まれたてのヒナは体温調整する機能が不十分なために、人間がこれを補ってやる必要があります。

農場に導入されたヒナは、温度や湿度が調整でき、新鮮な空気が十分に取れるような構造の幼すう鶏舎で飼育されます。

この時期の飼育管理が、後の産卵成績の良否となって現れます。飼育の留意点としては、病気や事故がないように健康に育てること、群全体の鶏の体重を正常範囲内にそろえること、へい死を少なくすることなどです。

このような飼育には手間がかかることもあって、ヒナがもう少し大きくなるまで専門の種鶏業者に飼育を任せ、その後に導入する経営もあります。導入日齢は、それぞれの経営により異なります。ふ化直後の初生ヒナを導入する場合から120日齢頃までに導入する場合もあり、さまざまです。

鶏には、他の鶏の尻をつつくという悪い癖があります。つつかれた鶏は出血したりストレスが加わったりして、産卵に悪い影響を与えます。この悪い癖は習慣性となることも多く、ヒナが小さいうちから発生をおさえる必要があります。

その手法のひとつにデビークがあります。デビークとは、ふ化後1週間頃に鶏のくちばしの一部(1/2~1/3程度)をデビーカーという器具で焼き切ることです。必要に応じ70日齢頃に再度切ることもあります。デビークすることによって、くちばしが配合飼料を摂取しやすい形状になり、飼料のむだも少なくなります。ただし、デビークを行っても悪癖行動を完全に防げるわけではありません。

育成

ヒナは、成長段階により、幼すう期、中すう期、大すう期の3つに区分します。これらはエサの給与と区分でもあります。

餌付けから28日齢までは、専用の飼育箱のようなものの中で飼育されます。幼すう期から中すう期になる頃には、羽毛が生え変わります。

ふ化後、75日齢頃までを中すう期といいます。この頃になると、30羽程度を1群にしてケージで飼育されるようになります。中すう期の終わり頃には見た目にもだんだんと鶏らしい様子になってきます。

110日齢頃になると卵を産み始める鶏がいます。概ね140日齢頃までには、すべての鶏が卵を産むようになります。

産み始める時期（日齢）は鶏の品種や季節、飼育管理法などによって異なります。

卵を産み始める頃の鶏の体重は、1.5kg前後になっています。

成鶏

産み始めの卵は小さめですが、「初卵（ういらん）」と呼ばれ珍重されることもあります。

産卵は通常140日齢前後で始まり、その後急速に高まって200日齢前後で産卵のピークを迎えます。これ以後、産卵率は次第に低下しますが、1個当たりの卵の重さは増加するので1羽の成鶏が生産する1日当たりの生産量はピークとなり、その状態が4ヶ月程度続きます。その後の産卵率は徐々に下がっていきます。

産卵のようすは、飼育される季節によっても変化します。日長時間が短くなっていく夏から冬にかけては産卵率が低下し、反対に、日長時間が長くなっていく初春から初夏にかけては産卵率も高くなります。採卵経営では、安定した産卵量を確保するために鶏舎内で点灯することによって、鶏が「明るいと感じる時間」を補正しています。

卵を産み始めた鶏は、12ヶ月間～18ヶ月間にわたり産卵を続けます。基本的には毎日1個の卵を産みますが、通常はパネルにも示すように、365日で300個程度の卵を産むことになります。

卵の1個当たりの重量を60gだとすると、1羽の成鶏は1年間で18kgの卵を生産することになります。

卵を生産するのに必要な飼料の量は、成鶏1羽1日当たりで110g程度です。これも季節や鶏の品種、月齢などにより異なります。

成鶏舎

成鶏は、1羽ずつ、または2羽ずつに仕切られたケージの中で飼育されます。

飼育環境は、自然の空気が循環するように設計された「開放式鶏舎」と鶏舎内の環境を制御できるように設計された「ウィンドウレス鶏舎」があります。それぞれの方式にはメリットもありますがデメリットもあります。

採卵経営では、施設の機械化が進んでおり給餌作業や集卵作業などの主な作業は、多くの場合、自動化されています。

給餌も自動化された給餌機で行われます。鶏舎内の列ごと・段ごとに給与量が調整でき、鶏の日齢・体重等に応じた適切な量の飼料が給与されるようになっています。

また、鶏卵はベルトコンベアのようなものに乗って集卵され、農場敷地内の特定の施設に集められます。

鶏卵の出荷

成鶏舎で産卵された卵は、選別され、正常な卵だけが出荷されたり、パックに詰められて販売されたりします。

最近では、新鮮な鶏卵を直接お客様に届けるために、直販に取り組む経営も多くなってきており、こういった生産者は自らの農場内で、鶏卵のパック詰め作業もしています。

産卵を始めたばかりの鶏は、生理上、まだ産卵のリズムが整わないので、黄身が 2 つある二黄卵や、殻が軟らかい軟卵などを産むこともあります。産卵期の後半では、殻の表面がざらざらしたり、ひび割れ卵が増えたり、時には奇形卵も産まれます。こういった卵や、鶏のふんや血液で汚れた卵などを、人間の目や機械によりチェックし、出荷前に抜き取っています。

* パネル内、文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。